

## 【第27回中村元東方学術賞 授賞理由】

ケネス田中博士は1947年に山口県美祿市でお生まれになりました。10才の時、日系アメリカ人の両親と弟2人と祖父母と共に、カリフォルニアに移住されました。新天地では、最初の2年間キリスト教の教会に通い、その後中学2年生の時、当地の浄土真宗のお寺で仏教に出会い、それが仏教研究へ進まれる発端になりました。

スタンフォード大学に入学、文化人類学を専攻し、在学中の1960年代後半から卒業された1970年はベトナム戦争や人権運動が起こり、暗殺が頻発するような激動の時代でした。このような社会的な混乱と「生老病死」という実存的な悩みは、若いケネス氏を仏教の道へと誘導したのでした。そこで米国仏教団が花山信勝東京大学名誉教授のリーダーシップの下で1966年バークレーに設立した米国仏教学大学院大学へ進学されました。

その修士課程終了の後、日本に留学、最初の一年間は、私共の東方学院に入学され、奈良康明先生の「サンスリット語入門」などを受講されました。翌年、東京大学大学院印度哲学科修士課程に入学し、早島鏡正、前田専學などの諸先生に師事し、高崎直道先生の下で修士論文「宝性論における信の研究」を提出されました。その後アメリカに戻り、カリフォルニア大学バークレー校研究科仏教学専攻博士課程に入学され、「浄影寺慧遠(523-592)の『観無量寿経義疏』と初期中国浄土教への影響」と題する博士論文を提出し、1986年にPh.D.を取得されました。

この博士論文は、1990年にニューヨーク大学出版から『中国浄土教の暁—浄影寺慧遠の『観無量寿経義疏』—』として出版されました。この研究は、それまで高く評価されていなかった浄影寺慧遠による浄土教への役割を再評価したものでした。この田中博士の研究によって、慧遠の『観無量寿経』の注釈が中国浄土教の発展に大きく貢献していたことが鮮明にされました。この研究の重要性は、2008年に中国の上海古籍出版社が『中国浄土思想的黎明』としてその中国語訳を出版したことで窺われます。

田中博士の浄土教研究のもう一つの側面は、浄土真宗の現代教学であります。それを代表するのが、『オーシャン：アメリカにおける浄土真宗入門』であります。この論攷は、今日でも浄土真宗関係の書物としてアメリカで求められる最も重要な一冊であるばかりか、日本でも『真宗入門』として邦訳され、2003年以来11回も重版されています。今年中には、ポルトガル訳も出版される予定です。

さらに、今一つの現代仏教学の研究成果として、2004年には、インドのバンガロール市にあるダーマラム大学出版から『浄土教：歴史的発展と現状』が出版されました。この論攷は、2003年に同大学で行われた講義に基づくものです。田中博士のこの領域におけるご業績はこれに留まりませんが、田中

博士の浄土教に対する熱意は、12年間に亘り国際真宗学会の会長を務められたことから窺うことができます。

田中博士のご研究には、第二の研究領域とも言うべき「現代仏教学」に関するご論考があり、それには三つの側面があります。すなわら（1）アメリカ仏教、（2）仏教と心理学、及び、（3）仏教とキリスト教との対話です。

最初の「アメリカ仏教」の研究は、初めて日本語で書かれた『アメリカ仏教：仏教も変わる、アメリカも変わる』、及び『目覚めの宗教—アメリカで出会った仏教、現代化する仏教の今』という代表的な著書によって象徴されます。今や田中博士は日本でのアメリカ仏教・西洋仏教の第一人者として知られています。

「現代仏教学」の第二の側面は「仏教と心理学」です。この分野への貢献は、田中博士が日本仏教心理学会の創立者の一人であり、過去六年間、その会長を務めてこられたことによって示されています。そして、「現代仏教学」の第三の側面は、「宗教間対話」ですが、これは長年のアメリカと日本での学会で発表されてきた業績を挙げるすることができます。

以上ケネス田中博士のご業績を概観致しました。そのお名前自体が明示しているように、国際的であり、博士の40年にわたる学究生活は、丁度20年ずつアメリカと日本にまたがって続けられました。またその間両国を超えて、インド、中国、ブラジル、ドイツなど11カ国で講義を行ってこられました。思えば中村元先生が東方学院の設立によって目指されたのは東洋思想の普及でした。審査委員会では、東方学院出身の田中博士が、今後とも国境を越えて東洋思想の普及のため、目覚ましく活躍されることを期待して今回の授賞となった次第であります。